

マンドリンギター—兩系の樂器を含む小合奏

マンドリンオーケストラはマンドリンギター系樂器を以て組立てられる大きい合奏であるが、マンドリン、ギター兩系樂器を含む小合奏、所謂室内樂と稱するものには如何なる種類があるか、今之を讀者諸氏と共に觀察研究して見やうと思ふ。

小合奏は二部、三部、四部、五部、六部合奏まである。然し最も多く用ひられるのは勿論四部合奏までである。

先づ小合奏の種類を擧げ其内容を簡單に解剖して見やう。

一、二部合奏

二部合奏は種類も随分多いが同時に今ではあまり現はれないものも尠くない。但し其中には充分注意すべき組合せもあつて今行はれないからと云つて無下に排する事は勿論早計である。二部合奏に就いて第一に注意しなければ成らぬのは獨奏に對する伴奏と二部合奏との區別である。マンドリン獨奏にギター(若しくはピアノ)の

伴奏と云ふ組合せがマンドリン及ギター(若しくはピアノ)の二部合奏と如何なる相違があるか。之を明瞭に判別する人は甚だ尠いのを遺憾とする。勿論譜面には可成曖昧な書き方をして居るものが多い。「マンドリン及ギター」と云ふ如きがそれである。中には「マンドリンギター二部曲」と記して實はマンドリン獨奏曲である場合も尠くないのである。

一言にして云へば或樂器の奏するパートが樂曲の中心骨子であり、之に對して或樂器のパートが全く前者の不足(主として和音に於て)を補ひ之を完全ならしめんとして附せられる場合、即ち主と従との關係に於ては前者の獨奏後者の伴奏であり、之に反して或樂器のパートが他の樂器のパートと平等の責任を與へられる場合は二部合奏であると云ひ得る。

序に云ひ度いのは助奏(オブリガート)と伴奏との別である。助奏は二つの樂器から成り立つ場合には現在では全く無いと云ふも過言でないのであつて茲に説く事は稍所を得ぬ嫌があるが實際に區別の立ち得ぬ人もあらうと考へるから附加へて置く。判り易く云へば伴奏は樂曲の構成上の補助であり、助奏は樂曲の色彩上の補助である。従つて前者が和音的であるに比し後者は多く旋律的である。或樂器の獨奏に或樂器の伴奏が附せられ樂曲の構成が完成されても尙且他の樂器の助奏を入れて之に色彩を加へると云ふ事もある。然るに或樂器の獨奏(それは伴奏によつて構成上の缺を補ふべきもの)に對して單に助奏のみが附せられると云ふ事はあり得ない。然し所謂マンドリンデュオ、即ち無伴奏形式のマンドリン獨奏に於ては或樂器の助奏を附せられる事が無いとは斷言出來ないのみならずピアノやギターの如き獨立樂器の獨奏に對しては殊に助奏が有効に用ひられる事があるわけである。即ち二つの樂器から成る曲に於て其一つの樂器が助奏として用ひられる事は全く無いとも云へぬのである。

A、マンドリン二部

マンドリン二個を以てする合奏曲は彼のムニエルの「ウナイレ・ドウルチ」「獨創的の二部合奏曲集」「演奏會用二部合奏曲集」等が大部分であると云へる。我邦に於ても數回公にされた事がある。然し樂曲の構成としてはマンドリン二個は勿論和音の不足を感じる事が尠くないから完全な樂曲は生れ難い。即ちマンドリン二部の特色は同一の樂器二つを以て旋律の對位を面白く示すと云ふ特異の點にある。「ウナイレ・ドウルチ」の如きもムニエルの最初の目的は練習者に單獨練習を行はしむる單一さから多少進歩した旋律の配合によつて練習を面白くさせやうとしたものであるらしい。

B、マンドリンとギター

此合奏曲は甚だ多く出版されて居るが其多くは眞實の二部合奏でなく寧ろマンドリンの獨奏にギターの伴奏とすべきものである。而も曲其物が多く凡庸でマンドリンパートは通俗的な旋律を奏でギターパートは平凡な和音を掻きならすのが多い。

即ち二部合奏として認め得るものは尠く且獨奏曲としても價值が少い。然し此合奏は音の構成上マンドリン二部の如き單純なものでなく和聲は豊かであるから作曲家が眞に之を生かさんとすれば必ず立派な曲が現はれ來る筈である。此合奏の前途は將に光輝あるもので私は先づ以てマンドリン及ギターのソナタの現はれる日を待つ次第である。

C、マンドリンとピアノ

此合奏も亦前者と等しく立派なものが今日では尠いのを遺憾とする。伊太利のマウツリ會社から出版されて居るムニエル其他の曲でマンドリンとギター及マンドリンとピアノ用に書かれたものは全部マンドリン獨奏であつて二部合奏でない。然し此合奏も亦前者と全然同一の意味に於て立派なものが生れ出づべき筈である。

D、ギター二部

此合奏は和音の構成が甚だ廣いのでマンドリン二部の如き狭い可能範圍しかもた

ぬものとは同日に論じられない。カルツリは此の二部合奏の爲に立派な曲を公にした。ギター二部曲ではカルツリが最も美しい作家となつて居る。然しソルがアグワドと合奏する爲に書いた作品第四十一番の「二人の友」の如きは此二部合奏曲として最大なるものゝ一つである。カルツリ、ソル、ジュリアーニ、クフネル等には此組合せの曲が多くある。

E、ギターとピアノ

美しい組合せであつてジュリアーニ、ド・カル、ディアベルリ等が盛んに此曲を書いた。ジュリアーニが大ピアノニストのモツシユルスと共に大きい二部曲を書いた事は知る人が多からう。ディアベルリはよい二部曲を書いた。其作品第六十八、第七十のソナタイネなどは今日でも手に入れ得る。然しギターピアノの二部として眞に兩樂器の特色を發揮した曲を求むれば甚だ寂寞を感じる。蓋し兩樂器とも撥絃樂器である事が作曲家を苦しめる一大原因であるには相違ないが然し作曲家が若し此兩

樂器の特色を充分理解するならば今迄に公にされたものよりはより美しいものが現れて來べき筈である。近年米國のピックフォードが作つた「詩的司伴樂」は勿論二部合奏では無く且又内容も全く同感するには稍距離があるが尠くとも兩樂器の取扱ひ方に關しては大分新らしい生氣が認められる。此生氣に眞摯を加へてギターピアノ二部曲を書いたならば必ずや不朽の名作が現はれるに相違ない。

F、ヴァイオリンとギター

ピアノが完成される以前に於てギターが重要に且廣大に使用された事は云ふ迄もない。従つて今日ならば當然ピアノが擔當すべきパートをギターがもつた事も亦云ふ迄もない。斯くして昔はヴァイオリンギターと云ふ組合せの曲が随分多かつた。勿論大部分はヴァイオリン獨奏ギター伴奏であるが然し此兩樂器の二部合奏も亦決して尠くはなかつた。大ヴァイオリンニストにして且ギターの優れた奏者たりしバガニーも作曲した。但し彼の曲は多くギターが伴奏の務めをもつて居り尙遺憾ながら

ギターパートは彼が優秀なギタリストであつたにも拘らず平凡である。ジュリアーニも勿論書いた。其他にも此組合を公にした人は尠くない。今日ではヴァイオリンは殆んどピアノと提携する事になつて仕舞つたが然しピアノとギターとでは其音色に全然相違があるから従つてヴァイオリンとの組合せがピアノの爲に排せられる理由は毫もないのである。惜しむらくは今日の一般作曲家がギターに對して薄識な事である。

G、マンドロンチエロとギター

マンドロンチエロ其物が新らしい楽器であるだけにギターとの二部合奏の如きは元より昔はなかつたのである。茲に特に擧げた理由は米國のピックフォード夫妻によつて數年前此二部の組曲「絃の物語」が公にされたからである。曲其物は囊記の司伴樂同様所謂米國式の薄い内容と華美な形狀をもつたもので従つて絶對の敬意を表するには躊躇せざるを得ないが清新なユムピネーションとして將來ある事は充分

人に認められた。

H、テルツギターとギター

テルツギターが無伴奏で獨奏される事は殆んどない。それは何故であるかと云へば元來テルツギターは高音を出す事を目的として作られたものであるから對比關係上ギター(若しくは稀にピアノ)と組合せて其特色とする高音を充分明瞭ならしめる結果である。ジュリアーニやクフネル等はテルツギター及ギターの曲を屢々公にした。然し之等は殆んどすべてがテルツギターの獨奏にギターの伴奏であつて二部合奏と書かれて居る事は首肯出来ない。然らば此兩樂器は二部合奏として用ひられるものでないかと云へば決してさうではなく寧ろ獨奏としてギターを伴ふよりも二部として立派な曲が生れる筈なのである。ジュリアーニの當時はテルツギターが世に現はれた時であつて其爲に彼等は此テルツギターを一般に紹介せんとして曲を書いた爲、勢ひテルツギターを主としギターを従としたに外ならない。彼の作品第七十

五及八十番のランドラー集は立派な例である。近來テルツギターが漸次葬むられんとする事は私の最も悲しむ處で此際ギター愛好家が此可憐なる小ギターに異常の同情を與へ作曲家は進んでギターとの二部合奏に此樂器の眞生命を授けん事を希望する次第である。

I、其他の二部合奏

ギターの黄金期に於てはフルート、ヴィオロンチエロ、クラリネット等と二部合奏曲が可成に書かれた。殊に前者は今日も尙多く残つて居る。然し今日以後の生命は甚だ覺束ないのみならず私等も亦必ずしも其復活を切望はしないのである。何となれば以前のギターと今日のそれとでは其扱ひが随分變化して居るからである。一例を擧げるならば當時はギターの姉妹樂器、即ちフレット樂器が殆んど無かつた。リウットも盛時を過ぎマンドリンは完成されなかつた。マンドラやマンドロンチエロは勿論現はれない。而も一方に於てピアノは完成されなかつたのであるから今日

ならばピアノを要求すべきものが當時ではギターをよめ、又ギターも彼等に結合する以外には結合の相手がなかつたのである。然るに今日ではマンドリンオーケストラが純フレット樂器で成立する一事を以ても知らるゝ通りギターの姉妹は非常に多くなつて居る。従つて徒に他系樂器と結ばんとするよりも概して効果多き自系樂器との結合に走るのは蓋し極めて自然な事である。

今現在は無いが將來注目すべきはリウット(現代の)とギター、マンドラとギター、マンドリンとマンドラ、マンドリンとリウット等の二部合奏であつて之等は理解ある作家の手によつて偉大な藝術を紹介し得る力を有する事を信するのである。

奥々も二部合奏は伴奏附獨奏と明に區別しなければ成らない。之は將來の二部合奏曲の發達の爲に最も大切な事である。

二、三部合奏

三部合奏は二部、四部等に比しては曲の數も少く且又演奏せられる事も尠い。然し二部に比すれば樂器が一つ多いだけに音樂としての可能範圍は廣いわけである。

A、マンドリン三部

ムニエルによつて此三部の合奏曲が書かれて居るがマンドリン二部に於けると等しく和音の不足と音性の單一とは免れない。従つて特殊の場合を除いては其藝術的可能性は甚だ狭いものである。

B、二マンドリンとギター

伊太利のプレクトラム音樂雜誌には屢々此三部の曲が現はれる。然し其多くがマンドリンギター二部に於けると等しく凡庸である。組合せとしては悪くはないが總括的に觀察すれば只三個の樂器をもつてする合奏に二つ迄同一樂器を用ふるよりは三個とも異つた樂器を用ふる方が理論上効果は多いわけである。

C、二マンドリンとピアノ

之も同前である。只二つのマンドリンが全然二部合奏となりピアノは其伴奏となる場合(之は勿論三部合奏ではないが)は別であつて新らしい價值を示すであらう。

D、マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ

三部合奏に於ける最も注意すべき組合の一つである。カムブリアは此組合せのセレナードを書いたが之は彼の獨奏曲よりも優れた力をもつて居る。恰もヴァイオリン、ヴァイオラ、ヴァイオロンチエロの三部合奏に於ける如く各樂器の音程の上から見るも變化は充分で結局三個の樂器を以てする最も好良な組合せと云ふ事が出来る。

E、マンドリン、マンドラ、ギター

ムニエルは「イ長調の三部曲」を此組合せで書いた。勿論此曲は單に此組合せのみならず諸種の組合せを用ひ遂に純粹のピアノトリオ(ヴァイオリン、ヴァイオロンチエロ、ピアノ)にさへ書いては居るが然しフレット樂器の純粹の編成として此組合せが最も注目に値する。前者と比較すればマンドリン、マンドラ、マンドロンチエ

ロは純粹のプレクトラム三部であつて全然マンドリン系の編成であるのに之はマンドロンチエロがギターに代つて居る爲に全體の氣分は著しく異つたものとなる。彼の優れた所は演奏上全然同一状態の三つの樂器を合せて而も變化を與へるにあり此の優れた所は三つの中一つは斷音の和音樂器を加へて他の二つとの間に大なる變化を與へるにある。優劣は敢て斷じないが面白い組合せである事は云ふ迄もない。

F、ギター三部

ギターのみを以てする三部曲も決して尠くない。理論上はギター二部に更に一個のギターを加ふるものであるから一層可能性を擴大するわけであるが實際に於てはそれ程でない。それは何故であるかと云ふに同一音性と同一音程とをもつて居り且斷音を主とする此樂器に在つては音の錯雜は寧ろ(極端に云へば)混亂を誘導する傾があるからである。古來此三部が二部よりも多くないのは蓋し如上の意味を語るものである。

G、其他の三部合奏

昔から書かれた三部にはヴァイオリン、フルート、ギターやヴァイオリン、ヴィオロンチエロ、ギター等がある。勿論それぞれ特色はあるが今日以後の生命は覺束ない。當然現はる可き組合せとしてはマンドリン、マンドラ、リウート及マンドリン、マンドラ、ピアノがある。前者はDの組合せと等しく注意すべきものである。後者はEに等しいが然しプレクトラム樂器に對するギターとピアノとの融合關係上Eよりも稍劣つて居る感がある。ピアノを加へるならば寧ろマンドリン、マンドロンチエロ、ピアノの組合せに私は期待をもつものである。人は考へないであらうが私はマンドリン、テルツギター、ギターと云ふ組合せが又面白い様に思はれる。

三、四部合奏

恰も二ヴァイオリン、ヴィオラ、ヴィオロンチエロの所謂絃樂四部が室内樂とし

て最も多くの可能性をもつ様にプレクトラム楽器に於ても四部合奏は藝術的に高い位置を保ち得る。

A、二マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ(又はリウット)

純粹のプレクトラム四部である。現在此組合せで發表されて居る眞實の四部曲としてはムニエルの「ト調」「ニ調」「ハ調」、大沼氏の「ハ調」、それにフアルポのがある。ムニエルの「ト調」は稍單純であり内容も小さいが他のものはすべて複雑な構成と優れた内容をもつて居る。マンドロンチエロとリウットと其孰れをとるがよいかと云ふ問題については私は孰れとも軍配を擧げ難い。結果から見れば徑庭はない。作曲家の考一つで或はマンドロンチエロを、或はリウットを選ぶのであつて敢て甲乙を附する必要はないと考へる。

B、二マンドリン、マンドラ、ギター

Aに於けるムニエルの三つの四部曲は此編成にも書かれて居るがAの編成による

方が此三つの曲としては優れて居る。然し一般には此編成が最も廣く書かれる。伊太利の「イル・プレットロ」「イル・マンドリーノ」等が掲載する四部は殆んど此組合せである。然し眞個の四部曲、(即ち三つ又は四つの樂章に分かれて居る完全な四部曲)ではなく通俗曲が多い。従つて現在に於てはAの方が藝術的に取扱はれて居るわけであるが若し作家がギターの特有な力を發揮せしめんとして此組合せの曲を書くならば偉大な收獲があるに違ひない。

C、其他の四部合奏

ムニエルの三つの四部曲は二マンドリン、マンドラ、ピアノの組合せにも書かれて居る。従つて此四部についても考慮する必要がある。元來私自身は四部合奏に於て低音部をマンドロンチエロ又はリウットで充たす方がギターを以てするよりも好きであり、ピアノを以てする事はギターを以てするよりも更に嫌ふものである。之は勿論單なる好き嫌ひであるが然しフレット樂器の組合せの適否と云ふ上から見ても

て必ずしも私の感情が誤つて居ないと考へる。勿論之は一般的觀察に於てであつて作家が自ら或樂器を組合せてその爲に曲を書く場合は其編成が價值あるのであるから如何なる組合せを用ふるも自由であつて敢て言葉を挟む餘地は無い。

フレット樂器の四部として開拓の必要ありと思ふものにマンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ、ギターがある。此編成は今日全く見られないが然し編成としては勿論特異なものであつても必ず良作曲家の手によつて良曲が生れ出でやうと思ふのである。

要するに四部合奏は最も宏大な天地を有するものである事を知らねば成らない。

四、其他の小合奏

四部合奏の次に五部合奏がある。二マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロ、ギターと云ふ編成が最も多い。然し今日迄五部曲として用ひたものゝ多くは實際に

は五部曲に非ずしてオーケストラ曲である。即ち五部編成には成つて居ても實は五人によつて演奏せられる事を期して居るのでない場合が多いのである。然し今後は純粹の五部曲も現れる可きである。それは從來のものゝ様にピアノとギターが同一任務をもつ様な不徹底な程度でなく各個が生かされる曲でなければ成らない。

ポツタツキアローリはマンドリン四つにマンドラと云ふ珍らしい五部の小組曲を書いた。之は勿論特殊の試みに相違ない。

六部合奏は今の處見られない。六部に書いてあるものはあつてもそれは五部に於けると等しくオーケストラ曲が多いのである。然しギターの黄金時代に於ては随分變つた六部編成が行はれた。一例を挙げれば二ヴァイオリン、ヴァイオラ、ヴァイオリンチエロ、フルート、ギターと云ふ如きがそれである。そして此當時には此外にも種々な組合せを以て三部、四部、五部、六部の曲が演奏されたものである。勿論管絃樂伴奏のギター大司伴奏さへ書かれたのであるから以上の如きは蓋し驚くに足り

ないのである。

五、小合奏團組織について

扱かねてから私の屢々稱へた事であるが我邦に於ても是非小合奏團の優れたものが現はれる事を望む次第である。合奏は必ずオーケストラでなければ藝術的地歩が占められぬわけではない。殊に小合奏は人数も少くてよいのであるから組織は簡単である。

先づ私の理想を述べるならばマンドリン奏者一人、マンドラー一人、マンドロンチエロ(若しくはリウット)一人、ギター一人、ピアノ一人のメンバーを以て合奏團を編成し、基礎を四部合奏に置く。所謂「何々クワルテット」と稱せらるゝものである。そして曲によつて三部も二部も、時によつては六部をも奏するのである。之だけのメンバーがあれば室内樂は大體作曲家の要求する通りの編成で演奏し得るわけ

であるから最も理想的である。

但し茲に最も注意を要する事は斯くの如き室内樂に於ては各人の技倆が同一に優れて居なければ成らぬ事である。オーケストラに於てはマンドリンは少くとも二人以上の人が分擔するわけであるから假令其内の一人の技倆が他より劣つて居ても比較的全體の效果に障りを來たさないが室内樂に於ては各パート皆一人の人が全部の負擔をもつのであるから一人たりとも技倆劣れる場合には演奏は不可能となる。故に室内樂に在つては特に技倆の近接したメンバーのみが集る事を要する。

合奏團組織の階梯として最初四五人のものが集まつて練習を開始し、稍糧まりかけた時には漸次七人、十人、と云ふ様に奏者を増す事を考へるものである。之も元より悪いと云ふのではないが然し若し平均した優秀な奏者が五人も集まつて居るならば、私は寧ろ初歩的な劣勢な奏者を加へる事をせず小合奏團、換言すれば室内樂合奏團を組織する事が望ましい。英國のロンドン・ストリング・クオーテット、米

國のフロンザリー・ストリング・クオーテット等が如何に高踏的な藝術的進程を歩んで居るかを知らる人はフレット楽器に於ても美しい小合奏團を組織する事が如何に意義ある仕事であるかは首肯し得やうと思ふ。

事實力あるクワルテット、クインテットは不均等な奏者を有する三十人のオーケストラよりも遙に大きい仕事が出来るのである。

本邦に於ては一時的組織として東京に田中クインテットがあり、稍継続的な組織として大阪のムニエル・クインテットがあつた。田中クインテットは第一マンドリン奏者として又リーダーとして田中常彦氏(澤氏)を有して美事な演奏を示したが一回の音楽會の後解散したのは誠に遺憾であつた。ムニエル・クインテットは可成長の間繼續して屢々演奏會を開いた。技倆の平均した奏者を擁して徹底した研究が積まれたが、其終り頃に稍ダイレクタントに墮したかの感を入々に抱かせたのは残念である。そして現在では暫く警咳に接しない。

外國の例として古くは伊太利のムニエルの第一次、第二次のクワルテットがあり、近くは米國のブレース等のクワルテットやカラーチエのそれがあるが孰れも一時的な組織に外ならない。

斯くの如くフレット楽器の室内樂團は今日迄餘り芳しい記録を残して居ないが今日の斯界として此小合奏團の出現が如何に必要であるかは識者のよく知悉する處であらうと思ふ。

云ふ迄もなく室内樂團はオルケストラとは全く異つた道を歩むものである。其演奏曲に到つて殊にさうである。オルケストラが將來益々多く現はれんとするに當り、室内樂團の出現は之と平行して實行される機運にある事を痛感する。